



演題名：在宅医療の症例レジストリシステム構築に向けて

演者名：木棚 究、水木 麻衣子、山中 崇

背景

- 本邦では在宅医療が政策的に推進されている。そのため海外と比較して多くの医師が訪問診療、往診を実施している。
- 在宅医療に関するエビデンスは乏しく、特に日本から発信されたエビデンスは限られている。
- 在宅医療では、医学的エビデンスに加え、本人・家族の意向（人生観や社会的状況）を尊重して対応するため、個別性が高い。
- 患者の主観的状況や生活状況を含め、在宅医療の状況を客観的に示した研究は限られている。

目的

在宅医療の症例レジストリ研究の確立を目指してパイロット研究を実施する。
本研究により在宅医療の状況を客観的に把握して、在宅医療の質の向上を図る。

対象

新規に訪問診療を開始した高齢者のうち、長期間（6ヶ月以上）在宅医療を受けると医師が推測した者。

調査協力：千葉県A市の在宅療養支援診療所
訪問診療開始日：2020年1月～2021年4月
対象者数 179名

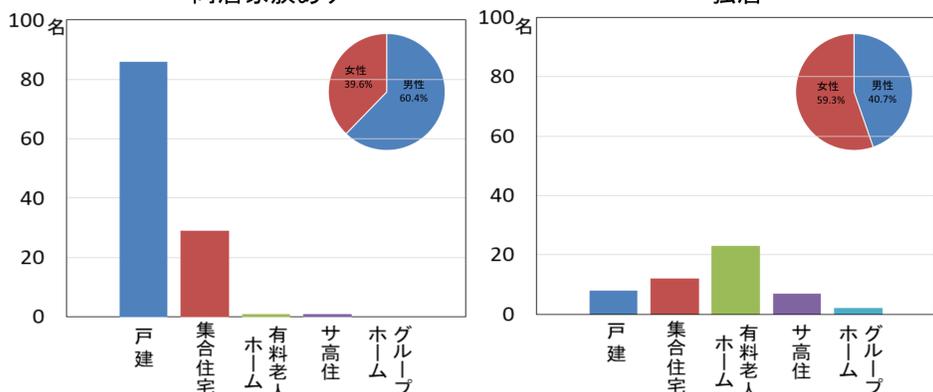
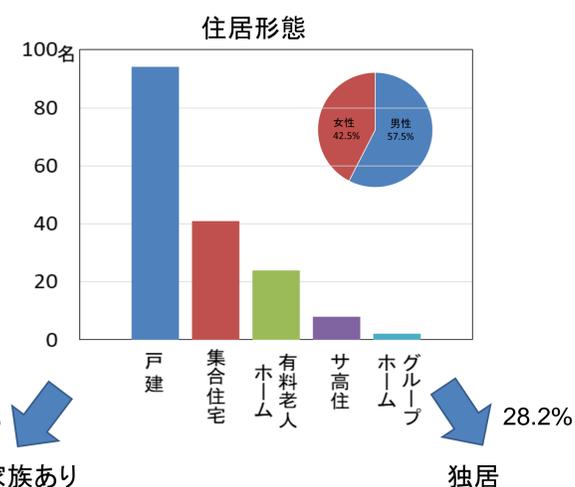
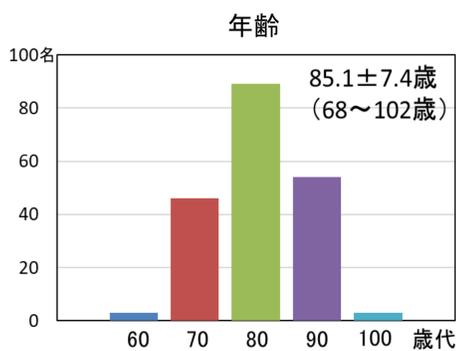
調査内容

- 基本情報、ESAS、DASC-21、EQ-5D-5L（健康関連QOL） 6ヶ月毎
- イベント（死亡、入院、救急搬送、入所・転所） 3ヶ月毎

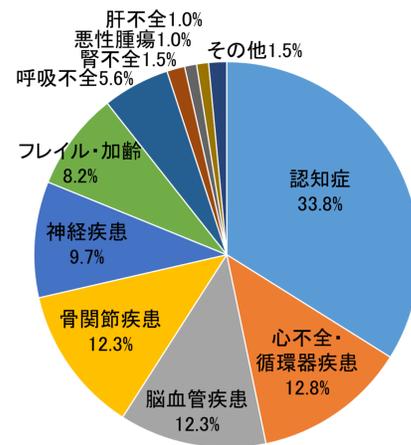
研究デザイン

前向きコホート研究

結果

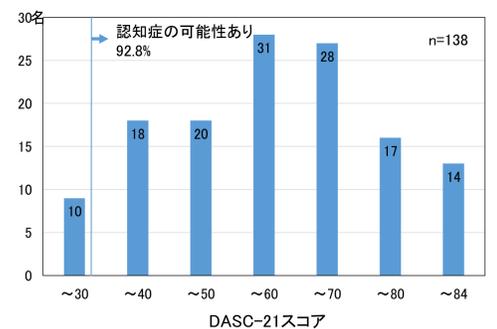


主病名



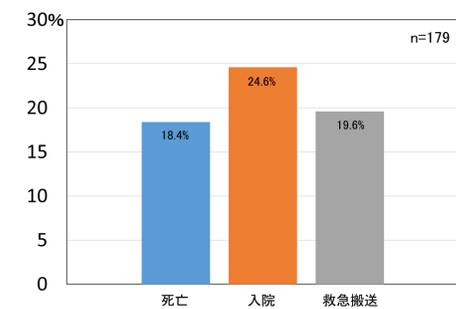
認知症を有する人 45.1%
DASC-21 ≥ 31 92.8%
悪性腫瘍を有する人 6.2%

DASC-21

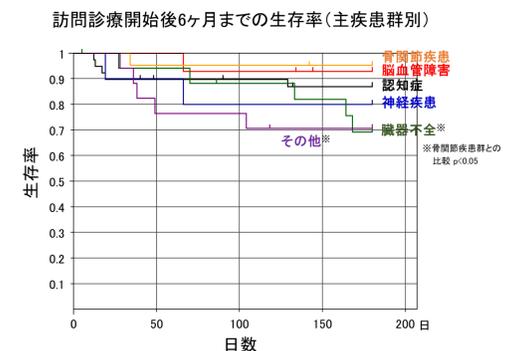


DASC-21: The Dementia Assessment Sheet for Community-based Integrated Care System-21 items、地域包括ケアシステムにおける認知症アセスメント
栗田圭一 東京都健康長寿医療センター研究所

訪問診療開始後6ヶ月間に発生したイベント



訪問診療開始後6ヶ月間までの生存率 (主疾患群別)



考察・結論

- 全国的には、在宅医療を受けている高齢者は女性が多い¹⁾。80歳以上の高齢者では、自宅よりも有料老人ホーム等の居住施設で在宅医療を受けている者が多く、この傾向は女性で顕著である²⁾。
- 本研究の対象者は、戸建や集合住宅など自宅で家族と同居している者が多いため、男性の比率が高かったと考えられる。
- 認知症により在宅医療を必要とした者は約1/3であったが、45.1%の高齢者で認知症を診断されていた。DASC-21のスコアが31点以上で認知症の可能性のある者は92.8%であり、在宅医療を長期間受けると見込まれる高齢者の大部分で認知機能低下を生じている可能性が推察された。
- 在宅医療を長期間受ける見込みの高齢者でも、6ヶ月以内に15%を超える者が死亡していた。主疾患群別にみると、6ヶ月後の死亡率は骨関節疾患群で低く、臓器不全群で高い結果であった。

1) Yamanaka T, Kidana K, Mizuki M, Akishita M. Comparison of regular home visits received by older male and female patients from physicians. Geriatr Gerontol Int 2021;21:1148-1150.
2) 平成30年度 第5回NDBオープンデータ(厚生労働省)